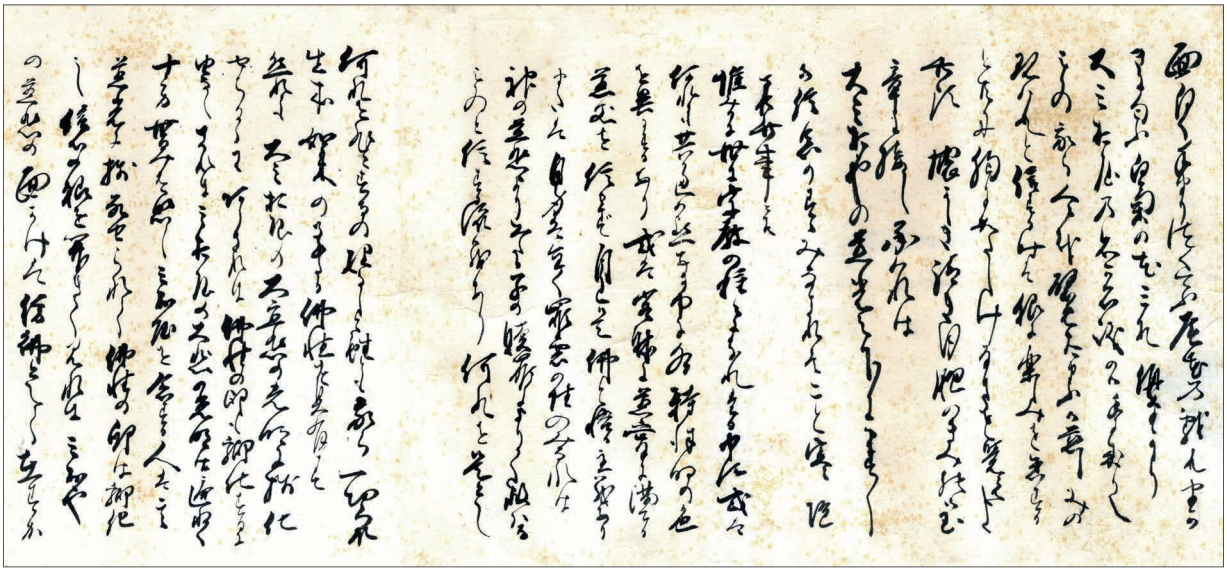


新発見光明資料 87

ひかり編集室訳

今月号より、京都恒村家宛の書簡を掲載していきます。最新の調査では、当家宛の書簡は、全部で十五通見つかっていますが、その内一通は、『辨栄上人書簡集』五九六頁に掲載されているのみで、その原本は見つかっていません。その外の十四通をここで掲載していきたいと思います。

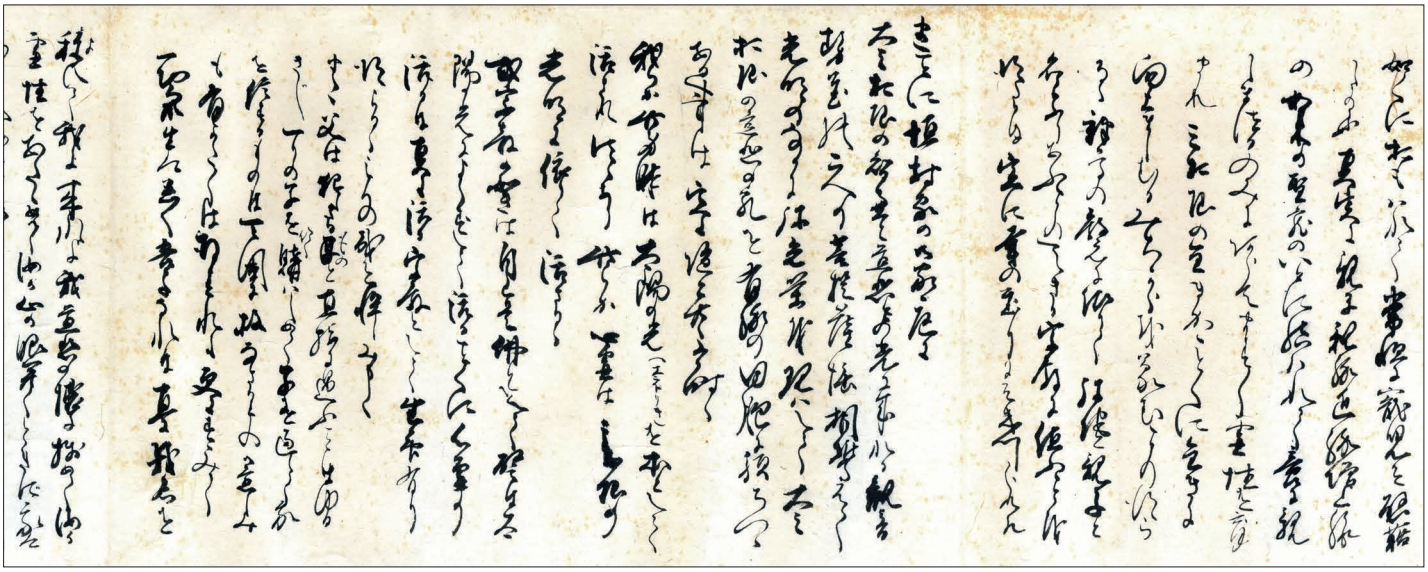
恒村家宛書簡　一　（全十五通）

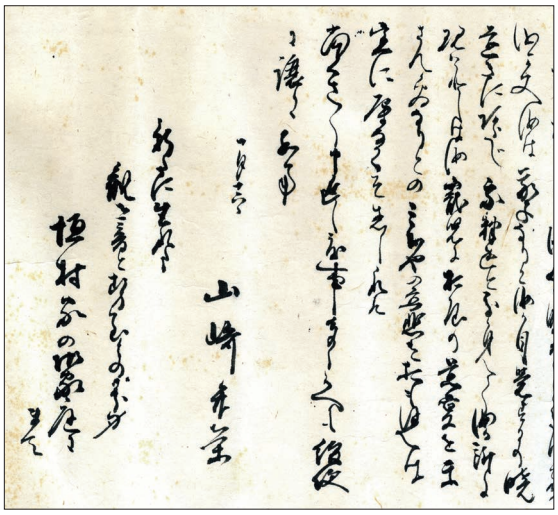
面白く手まりつくてふ尾花の戯れ　たかきに匂ふ白菊の花

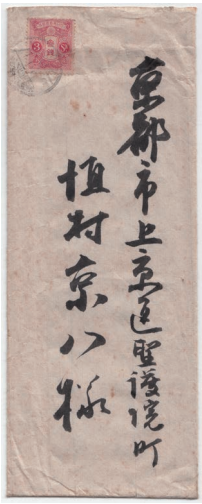
みな、*併しながら大ミオヤの不可思議の御手に成りしもの。我ら人々を慰めたまう御慈しみの現われと信ずる時は、眼に楽しみを感ずると共に、胸にかたじけなさをも覚え申候。

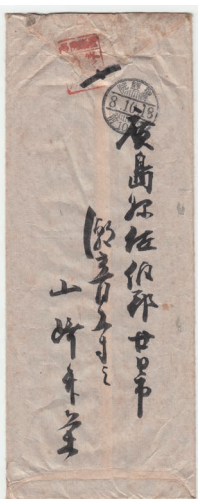
此頃、懐かしき清き同胞のきみの御玉章に接し、承われば、大ミオヤの慈光の下に、ますます御信念のすすみなされ候こと、実に随喜此事に候。

惟みるに、世に宗教の種々にわかれたる中に、或は何れも共通の点ある中に、各々特殊的の色を異にするあり。或は客体に慈愛に満てる慈父を信ぜず、自己是仏と悟る主義あり。または自身は全く罪悪の性のみなれば、神の慈悲よりみたる子の贖罪によりて救わるものと信ずる流義あり。何れを是とし、何れを非とするの理なしと雖ども、我ら一切衆生、本如来の御子たる仏性を具有す。然れども大ミオヤの大慈悲の光明に摂化せらるるにあらざれば、仏性の卵も孵化するに由なし。さればミオヤの大悲の光明は遍ねく十方世界を照し、ミオヤを念ずる人は、其慈光に摂取せられて、仏性の卵は孵化し、信心の眼を開きて見れば、ミオヤの慈悲の面かげは彷彿として在すが如くにおもわれて、常恒に寵児を慰藉し給う。真実に親子、親縁・近縁・増上縁の如来の聖寵のいとに結ばれて、意に親しみまつるのみにあらで、ますます霊性を育まれ、ミオヤの全きがごとくに全きに向上せしむるみちからを蒙む〔る〕ことの得らるる釈尊の教えに依りて、弥陀と親子と名のりあうことのできる宗教に値うことを得たるは、実に幸の至りにぞ感じられ候。









まことに恒村家の御家庭に大ミオヤの智慧と慈悲との光に成れる観音・勢至の二人の菩提薩埵、相携えて、光明のなかに弥光栄を現わして、大ミオヤの慈悲の乳を有縁の同胞に頒ちつつある事は、実に随喜不耐候。

我らが此身体は、太陽の光（*エネルギー）を本として活されつつあり。我らが心霊は、ミオヤの光明に依りて活さるる。或宗教の如きは自己是仏として、譬ば太陽の光によらずして活るごとくに、心霊の活るは、真に活る宗教として生命有り得らるるもの哉と怪しみ申候。

また父は犯したるものと直接に遇うことはゆるさじ。一りの子を以て贖わしめて、子を通じて我を信ずるものは天国に救なさるとの御慈しみも有がたくは存すれども、更にすすみて一切衆生は悉く吾子なれば、真に我名を称びて我に来れよ。我慈悲の懐に摂めて、汝が霊性をあたためて、汝が心の眼開くときに、我は汝が父、汝は我子なりと、汝が自覚するの暁、遠きにあらじ。我、釈迦と分身して汝が所に現われしは、汝、寵児にオヤの慈愛を示さんが為なりとのミオヤの慈悲をおもほえば、実に辱なくぞ感じられ候。尚、くさぐさ申進じ度事多く候えども後便に譲り候。和南

十月十六日　山崎弁栄

新たに生れた観世音と勢至との御分身、恒村家の御家庭にまで。

〔封筒表〕　京都市上京区聖護院町　恒村京八様

〔消印日〕　大正八年十月十七日

〔封筒裏〕　広島県佐伯郡廿日市　潮音寺にて　山崎弁栄

・「併しながら」―そっくりそのまま、すべての意

・「エネルギー」――原本では「エネリキ」

・本書簡は『たより中』「八四」に既出、ただし文面の異同多し。